

〔三宅島特産園芸作物における生産振興技術対策〕  
アシタバの収穫頻度が生育および収量に及ぼす影響

沼尻勝人・伊藤 綾・西村修一  
(島しょ農林水産総合センター三宅事業所)

---

【要 約】 収穫頻度が高いほど茎径が細くなり調整重は小さくなるが、抽苔株率は低く、収穫葉数および収量が多いことから、週2回の収穫頻度で収益性は最も高い。

---

【目 的】

特産物であるアシタバの生産拡大を図るためには、高齢化や後継者不足により規模拡大は困難であり、効率的に反収を上げることが重要となる。また、栽培方法においては不明な点が多い。そこで本試験では、収穫の頻度と生育および収量の関係を明らかにし、適切な栽培管理に寄与する。

【方 法】

供試したアシタバは、2006年11月13日に育苗床へ播種し、2007年5月14日に圃場へ移植した。栽植様式は、ベッド幅120cm、通路60cm、栽植密度2593株/a(条間20cm×株間15cm)とし、2007年8～9月は、防風網(遮光率33%)を群落上部に展張した。施肥は、基肥に成分量でN-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>Oを2-2-1.5kg/a、追肥は0.5-0.5-0.5kg/aとし1～2ヶ月ごとに施用した。収穫頻度は、週2回、週1回、2週1回、4週1回の4区を設定し、各区3.6m<sup>2</sup>の2反復で収量(2007年7月～2008年6月)を調査した。生育は、群落内の中庸な10株を選定し、継続して適時調査した。

【成果の概要】

- 1) 収穫頻度が低いほど草丈は高く推移した。いずれの区も移植から12月までは増加傾向にあったが、12～4月までの増減はほとんどみられず、4月以降再び増加する傾向にあった(図1)。
- 2) 収穫調査終了時の抽苔株率は、収穫頻度が低いほど高く、週2回の61%に対し4週1回では78%であった。また、株の茎径は収穫頻度が低いほど太かった(図2)。
- 3) 収穫葉数および収量ともに、収穫頻度が高いほど多いが、調整重(1葉重)および葉柄径は収穫頻度が高いほど小さかった。また、葉色はいずれの区も同様であった(表1)。
- 4) 調整重は、葉柄長が長くなると減少する傾向もみられたが、葉柄の拡大にしたがって増加する傾向が強くみられた(図3)。
- 5) 月別の収穫葉数および収量は、週2回の8月および12～2月の値で週1回を下回った以外は、収穫頻度が高いほど多い傾向で推移した(図4)。
- 6) 粗収益は、栽培期間中の平均単価をもとに算出した場合、週2回で約128万円、週1回で約93万円、2週1回で約49万円、4週1回では約24万円であった(図5)。
- 7) 以上より、収穫頻度が高いほど茎径が細くなり調整重は小さくなるが、抽苔株率は低く、収穫葉数および収量が多いことから、週2回で最も収益性が高いと考えられる。なお、本試験では施肥条件を各区とも同様としたが、施肥量および施肥方法を変えて調査する必要がある。

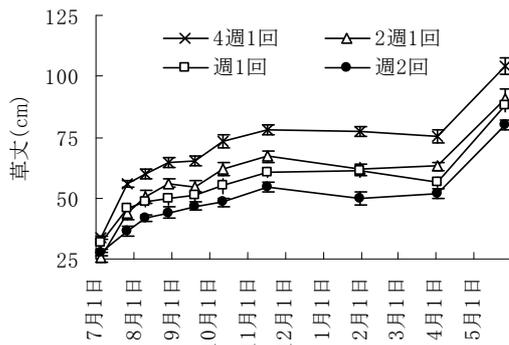


図1 アシタバの収穫頻度と草丈の関係

注) 図中のバーは標準誤差(n=10)を示す

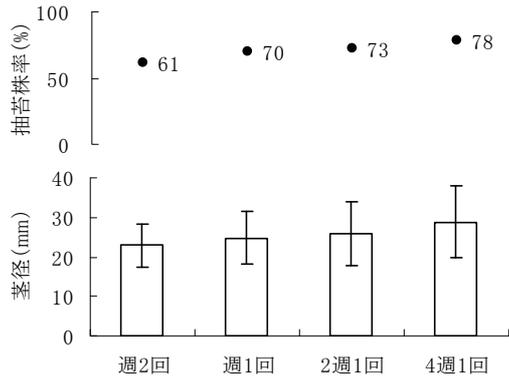


図2 アシタバの茎径および抽苔株率に及ぼす収穫頻度の影響

注) 2008年7月3日調査. 茎径は全株の茎径. 図中のバーは標準偏差を示す.

表1 アシタバの収穫頻度が収量に及ぼす影響

処理区 (収穫頻度)	収穫葉数 枚/a	収量 kg/a	調整重 g	葉柄径 mm	葉色 SPAD値
週2回	10737	172	17.4	8.2	26.4
週1回	7959	127	17.9	8.3	26.7
2週1回	4320	70	18.0	8.4	26.5
4週1回	2000	36	20.3	8.9	27.1

注) 調査期間2007年7月5日～2008年6月27日  
調整重は葉長30cmに調整したもの

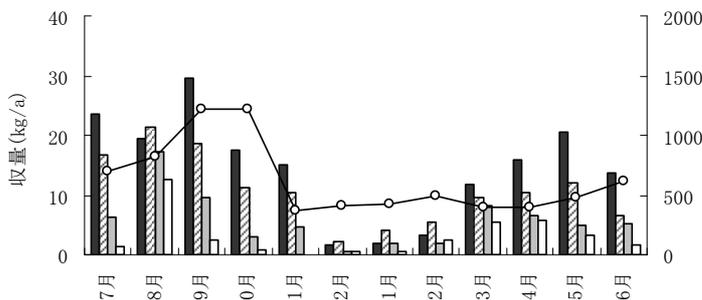
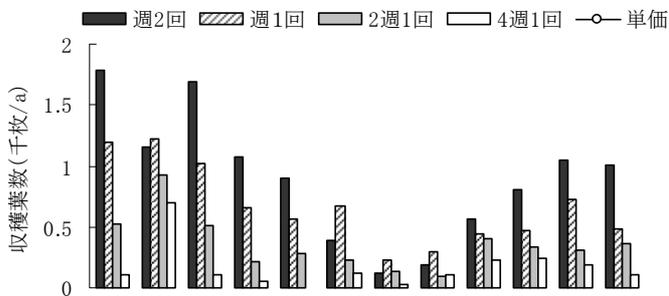


図4 アシタバの月別収穫葉数および収量に及ぼす収穫頻度の影響

注) 単価は平成19～20年度中央卸売市場単価.

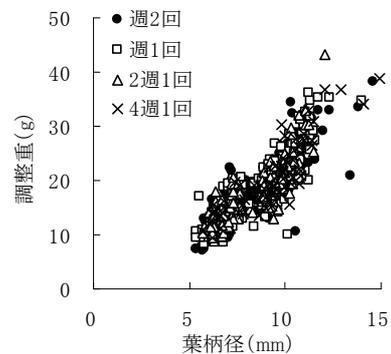


図3 アシタバの葉柄径と調整重の関係

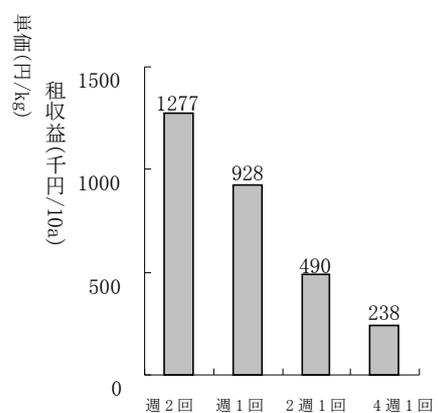


図5 アシタバの収穫頻度と粗収益の関係

注) 平成19～20年度の月平均単価を使用.